ブラックホール惑星

石原藤夫

著者略歴　昭和8年生，早稲田大学電気通信学科卒，工学博士，作家　主著書「生きている海」「コンピュータが死んだ日」「SFロボット学入門」「ハイウェイ惑星」（以上早川書房刊）他多数

HM=Hayakawa Mystery
SF=Science Fiction
JA=Japanese Author
NV=Novel
NF=Nonfiction
Jr=Junior

ブラックホール惑星

〈JA110〉

昭和五十四年一月十日　印刷
昭和五十四年一月十五日　発行

（定価はカバーに表示してあります）

著者　石原藤夫
発行者　早川清
印刷者　矢部富三
発行所　株式会社　早川書房
郵便番号　一〇一
東京都千代田区神田多町二丁目二
電話東京（二五四）一五五一（代）
振替番号　東京・六-四七七九九

乱丁本・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・三松堂印刷株式会社　製本・株式会社明光社

ハヤカワ文庫JA
〈JA110〉

ブラックホール惑星

本書中の挿入歌は、ＳＦファンダムのＢＮＦであり、また博多にわかのオーソリティである松崎真治氏の作詩・提供によるものです。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

ブラックホール惑星……三
ホワイトホール惑星……一四一
情報惑星……二三七
調査業績一覧表……二七三

ブラックホール惑星

コーヒー・ブレーク／午前十時

未知惑星の調査開発を請負って全宇宙にその名もたかい〝惑星開発コンサルタント社〟の本社ビルは、月の裏側にある。

その建物は、節約第一主義の社長方針にふさわしく、貧相な骨格を派手な壁面でカバーした百一十階だてだった。

しかし、建物はプレハブ的であるといっても、その経営内容と人材は――読者がとうにご存じのとおり――かけねなしの一級品である。

とくに、九十階にある惑星開発部の惑星調査課は、人材の宝庫として内外に喧伝されていた。

「オシハラくん、そろそろコーヒーにしようじゃないか。もう十時五分まえだ……」

惑星開発部の部長室で、調査課長の報告を聴いていたシタバヤシ部長は、書類をぱたんと閉じた。ひょろ長い手脚がたいくつそうにゆれ動いている。

オシハラ調査課長はあわてて時計を見た。そして、恐縮した顔で、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

「や、これはどうも気がつきませんでした。仕事熱心のあまり、朝からもう三十分もお話してしまいました。じゃ、このへんで一時間ほどご休憩を……」

と言ってからインターホンに向きなおり、一声どなった。

「コーヒー」

十秒もしないうちに、ドアがひらいて、コーヒーがはこばれてきた。

トレイをささげてきた女性は、はっとするような美人だった。すばらしいプロポーションとぬけるように白いきめこまかな肌。髪は黒くながく、漆黒の眸はやさしく輝いている。

ＳＦ的にいうと、ワンダーウーマンとバイオニック・ジェミーとメーテルさんを合せたような感じである。

シタバヤシ部長はその姿を見て、ヨダレの出そうな声で言った。

「ミドリくん、どうだね、もうなれたかね？」

「はい、オシハラ課長さんがとてもとても親切ですので、なんとか……」

「ふうん、オシハラくんてそんなに親切な男だったかなあ……」

オシハラ課長はあわてて熱いコーヒーを飲みこみ、眼を白黒させた。シタバヤシ部長はもっともらしく、

「ま、しっかりやりたまえ。みんなきみが来てからハッスルしておるようだからな……」

「ありがとうございます」

ミドリと呼ばれたその美人は、優雅に一礼するとトレイを下げて退出した。その姿はまるでＳ

F画から抜け出たようだった。

シタバヤシ部長は、ドアがしまると、ちぢこまっているオシハラ課長に大声で話した。

「まえにも言ったように、彼女はうちの重役の持ちものだ。重役のつよい希望できみの課の秘書にしてあるが、いずれは家庭にもどることになるのだから、キズなどつけないように気をつけてくれたまえ。あの重役ににらまれると、おれもきみも、出世があぶないからな」

「は、それはもう、じゅうぶんに注意いたしまして、人間なみの扱いを……」

オシハラ課長はしゃちほこばった。

シタバヤシ部長はコーヒーをすすり、話題を変えた。

「ところで、きみの課の連中の最近のようすはどうだね。元気でやっとるかね？」

「は、元気はつらつとしております。ただ、どうもみんな惑星調査を会社の利益にむすびつけるのが苦手でして……」

「そりゃ、まだ若いのが多いからしかたがない。しかしヒノとシオダなんかは、もうだいぶ経験をつんだから、商売のこともちっとは考えてくれるんじゃないかね？」

「それがなかなか――」オシハラ課長は首をふった。「――あのふたりは結婚しても気が若くて、新入社員なみの精神状態ですよ」

「ふうん」

「しかし、ちかごろの青年にはめずらしくケッペキなところがありまして、それがとりえといえばとりえですが」

「すると、例のブラックホール・シンジケートがらみの仕事をしてもだいじょうぶだな？」
「は、それはもう、買収されるようなことは絶対にありません」
「日常生活の金銭感覚なんかはどうかね？」
「まったくありません。家計はすべて嫁さんまかせのようでして……」
「それはたのもしい。そこをみこんで、こんどの事件は彼らに担当させよう。ただ、ふたりだけでは人手不足で心もとない点もあるから、大型ロボットの安いのをひとり、助っ人に出そう。調査員をふやすわけにはいかんが、ロボットならなんとかなる。技術陣のすすめもあるしな……」
「例のポンコツでございますか？」
「そうだ。とにかくヒノやシオダは休ませてはいかん。遠慮なくこきつかいなさい」
「は、休暇は最小限にしてこきつかいます。彼らが仕事に行ってしまえば、秘書もそれだけわれわれべったりになりますし……」
「それはいい……ア、いまなにを言った？」
「は、いや、その、なんにも、エヘヘヘ……」
「あ、そうか、ウフフフ……」
こんな話がしばらくつづき、やがて十一時になった。十時からのコーヒー・ブレークがおわり、昼までの勤務がはじまる時間である。
オシハラ課長はデスクの上の書類をファイルにしまうと、そそくさととなりの課長室へ消えた。シタバヤシ部長は書類のおいてあったあたりにながい両足をのせ、テレビをつけて鼻毛をぬき

はじめた。

課長室をはさんで、部長室と補佐室とは反対がわにある。

その補佐室にはふだんオーケ補佐とミドリ秘書がつめているのだが、ソファが置いてあるのと、秘書のサービスがいいのとで、コーヒー・ブレークになると課員が集まる習慣ができてしまっている。

というわけで、いま顔を見せたのは、前回の惑星調査の報告書を書きおえたばかりのヒノとシオダだった。

「社の利益のために己れの探究心を犠牲にした調査ばかりだなあ、おれたちのは……」

ヒノは気どった調子で言った。

「課長が読みやすいようにイラストを中心にし、本文は五枚以下にしました。むずかしい話は付録にまとめてあります」

シオダは淡々とした口調でこう説明し、持参した報告書を補佐のデスクに置いた。

補佐はなかは見ないでポンポンと日付印を押し、決裁箱にしまって秘書のデスクに乗せた。課長室にとどけろという意味である。

ミドリ秘書はそれにはかまわず、ヒノとシオダの顔をのぞきこんだ。

「おふたりさん、お飲みものはなにになさいます?」

ヒノがにこにこした。

「ピーコックのパラサイト割り――じゃなかったパラサイトにピーコックを落したやつ」
パラサイトとは《パラサイト惑星》特産のブラック・コーヒーであり、ピーコックとは《ピーコック惑星》の生物の汗を蒸留してつくっためずらしい高級酒のことである。
「わかったわ。シオダさんのほうはいつもとおなじね」
ミドリ秘書はティーキャビネのまえで手品つかいのように両手を動かすと、電光石火のはやわざでふたりのカップをそろえた。
「うまいなあ！」
ソファに腰をおろしたヒノは、カップに口をつけると、フーッと息をはいた。
「うれしいわ」
ミドリ秘書はデスクにからだをもたせて、ほほえんだ。
ヒノはニキビの痕をさすりながら、シースルーにつつまれたプロポーションをまぶしそうに眺めた。
「ミドリさんて、なんでこんなところに来たの？」
「わかんない」
「まえは重役さんちにいたんだろ？」
「そうよ。お嬢さんのお相手」
「そのまえは？」
「地球をあちこち……」

「ロボットって、最初に買われたご主人の姓を名のるんだってね？」
「習慣としてね」
「ミドリさんの場合は？」
「日本地区で、撚鳥さんっていうの」
「すると、ヨリドリ・ミドリか、すげえ名まえだなあ」
「名まえのせいか、あちこち転々として苦労したのよ、これでも。流れ流れて浮き草の、花ははかないこの運命（さだめ）――よ」
「へ、地下街のお茶漬屋のママさんみたいなこと言うなあ」
「あら、ヒノさん、あんなお店に行くの？」
ミドリ秘書の顔がまじめになった。
「ときどきさ。どうして？」
「あたし、小耳にはさんだんだけど――」ミドリ秘書は声をひそめた。「――あのお店がブラックホール・シンジケートに関係しているんじゃないかって噂があるのよ。課長さんがお偉方とときどきひそひそ話をしているわ」
「そりゃ一大事だ」ヒノは立ちあがった。そしてなにやら計算しているシオダの肩をたたいた。
「おいシオダ、きいたか？　ブラックホール・シンジケートってのがあるそうだぞ」
しかしシオダは悠々としていた。センブリとゲンノショウコを発酵させて、それに竹葉と人参を混ぜた飲料を口にふくみ、ゆっくりと味わっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com